

第五回連載

# 社会経済問題としての 高血圧

東京大学大学院医学系研究科  
社会予防医学分野

教授 佐々木 敏

高血圧は痛くも痒くもない。症状はまったくない。突然倒れることが、まして突然亡くなるといったことはまず起こらない。怖いのは、高血圧ではなく、高血圧が原因となって起こる、とても厄介な数多くの病気のほつである。脳卒中と心筋梗塞は有名だが、最近、急増している糖尿病にも高血圧が絡んでいる。また、最終的には一人当たり年間五百万円から六百万円もかかるという、破格に高い医療費が問題となっている人工透析が必要となる慢性腎臓病もそのひとつである(図)。脳卒中ではたとえ救命に成功してもその後のリハビリが必要になる。本人だけでなく家族もたいへんだが、その費用もけって軽いものではない。認知

症にもかかりやすくなる。本人だけでなく、認知症の患者の家族が抱える苦勞や苦悩は大きな社会問題となっている。これらの病気に共通する恐ろしい特徴は『一度罹るとほとんど治らない』ことである。しかも一部の脳卒中と心筋梗塞を除けばすぐには亡くならない。一度罹ったら一生(この病気が他の病気で亡くなるまでずっと)治療を続けなければならない。これは膨大な患者人口と高額の医療負担を、常時、社会が抱え込むことを示している。

問題は、その費用(医療費)をだれが払うかである。患者本人が自前で払うのなら問題は生じない。ところが、わが国では本人負担は一部であり(それでも安くはないが)、残りは病気に罹っていないだれかが肩代わりして負担している。つまり、高血圧を恐れているのは高血圧患者自身ではなく、高血圧患者を抱えている社会である。高血圧の原因のひとつは食塩の過剰摂取

である。つまり、高血圧の問題や食塩の過剰摂取の問題は、個人の健康問題としてはなく、社会全体の経済問題として捉えて初めて事の重大さが見えてくるのである。

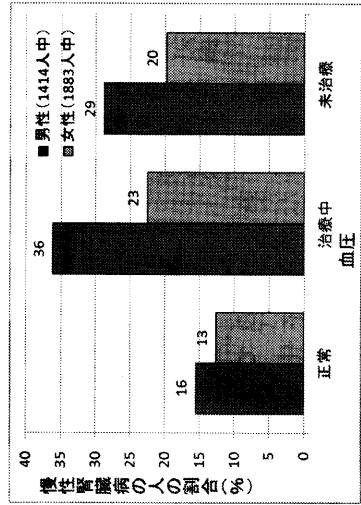


図. 血圧別にみた慢性腎臓病の人の割合(%)。福岡県久山町で平均61歳の住民を調査した結果

Nagata M, et al. Nephrol Dial Transplant 2010; 25: 2557-64  
より改変引用。